

令和３年度学校自己評価表（中間評価）					鳥取県立米子南高等学校	
中長期目標 (学校ビジョン)	大胆な挑戦 １ 意欲を育てる＝「主体性を育てる」「やる気を引き出す」 ２ 成長を支える＝「人と出会い、新たなことへの挑戦を促す」 ３ 変化を求める＝「現状に満足しない」「アンテナを高く張る」				今年度の重点目標	１ 基礎学力の向上 ２ 基本的生活習慣の確立 ３ キャリア教育の充実 ４ 地域社会への貢献 ５ 的確な情報発信 ６ 業務改善の取組

年度当初					中間評価		
評価項目	評価の具体項目	現状	目標（年度末の目指す姿）	目標達成のための方策	経過・達成状況	評価	年度末に向けての改善策
【基礎学力の向上】 ○社会人として必要な基礎学力・一般教養の習得 ○「主体性を育てる」「やる気を引き出す」授業の工夫・改善	○家庭学習を充実させ、基礎学力の定着 ○社会人として必要な力、一般教養を習得	○学校評価アンケートでは、１日あたり１時間以上の家庭学習を行う生徒は２２％と少ない。関連して、家庭学習や自主学習ができているかの問いでは、５６％ができていないと回答している。 ○ICTを活用した授業を実施したと回答した教員は、６８％、授業アンケートの集計結果等にもとづき、生徒にとってわかる授業の工夫を進めた教員は、８３％である。 ○生徒の授業理解における肯定的評価は７９％であった。また、朝読書・朝勉強テスト等で知識が身についているとする生徒は８１％であった。	○１日の平均家庭学習時間が１時間以上である生徒が４０％以上である。 ○ICT等を活用し、生徒の興味関心を育み、考える力を培う授業が広く実施されている。 ○生徒の授業理解における肯定的評価が８０％以上、また朝読書・朝勉強テストで知識が身についているとする生徒の割合が８５％以上である。	○定期的な宿題、各種検定、基礎学力テスト、朝勉強テストなど生徒にとっての身近な学習機会を通じて学習意欲を喚起し、家庭学習を充実させる。 ○GoogleClassroomの活用等、授業改善を目標に、主体的・対話的かつICTを活用した授業を設計できる教員を増やすため、教員研修の機会を設ける。 ○読書活動が円滑に進むよう「らいぶらりん」、「図書館通信」の内容を充実させて情報提供していく。	○１学期の家庭学習時間調査の結果は、１時間程度の割合が、１年２８％、２年２３％、３年１７％であった。 ○ICT研修を２回実施した。各教科ともICTを積極的に活用している。 ○感染症拡大防止の観点から、従来のグループワークや実践的な学習がしにくい状況であるが、各教科工夫して授業を実施している状況である。 ○朝読書の時間に、読書以外のことを行うなど、朝読書を継続する意義についてなかなか浸透していない。	B	○朝勉強テストの成績優秀者を掲示するなどして学習意欲を喚起していく。 ○教職員のレベルに合わせた研修を企画し、Chromebook等を用いた授業の準備を継続していく。年間計画で５回程度を計画する。 ○朝読書を学校全体で取り組み指導していくために、必要な環境（昇降口貸出や読書イベントなど）を調べていく。
【基本的生活習慣の確立】 ○知・徳・体のバランスが取れ、社会人として必要な規範意識を身につけた人物の育成 ○あいさつの励行、ルールとマナーを遵守することの啓発	○知・徳・体のバランスが取れた良い生徒の育成 ○社会生活におけるルール・マナー・モラル等を遵守する習慣や規範意識の育成	○授業前後の分離礼の取組は概ね成果を上げ、習慣化しているが、生徒によっては取組姿勢にばらつきがある。 ○多くの生徒が服装頭髪検査で問題ないが、再検査や再指導の対象となる生徒が若干名いる。 ○SNSを利用している生徒が多く、トラブルが増加の傾向である。 ○多くの生徒が落ち着いた学校生活を送っているが、中には人間関係に悩み、不安を抱え、基本的生活習慣が乱れる生徒がいる。	○ルール・マナー・モラル等を遵守する規範意識、特に情報モラルの意識が高まっている。 ○生徒が主体的に考えて行動し、より良い人間関係を築き、充実した学校生活を送っている。 ○分離礼の習慣が学校生活全体に広まっている。 ○学校評価アンケートで、生徒・保護者の「基本的生活習慣の確立」項目の肯定的評価が９０％以上である。	○生徒会執行部を中心とした生徒主体のあいさつ運動を展開していく。 ○SNS利用に関する情報提供やトラブル防止の啓発活動を継続して実施する。 ○服装指導、遅刻指導について、家庭との連絡を密にして取り組む。 ○不安を抱えている生徒について迅速に対応し、担任、学年団、SC、SSW及び関係機関と連絡を密に行い生徒を支援していく。 ○分離礼については、できるだけ繰り返すなど徹底して指導する。	○生徒会執行部を中心としたマナーアップ運動やあいさつ運動を通じ、自身の生活態度を振り返り、考え行動する機会とすることができた。 ○情報モラルLHRや非行防止教室など啓発活動を実施した。スマホの不適切な使用は増えた。 ○服装の乱れ等が改善されない生徒に対して、担任と連携し継続して指導している。 ○年度半ばになり、新しい環境にも慣れ、多くの生徒は落ち着いた学校生活を送っているが、悩みや不安を抱えている生徒もいる。 ○ハイパーQUやストレスマネジメントを行うとともに、不安を抱えている生徒について保護者・担任・SC・部活顧問等と連携し対応している。 ○分離礼の実施についての教員側の指導はおおむね定着している。しかし、年度の途中でいい加減になってしまっているクラスもある。	C	○前期生徒会の任期もわずかとなっており活動の総括を行うと共に新しい生徒会への引き継ぎを進め、生徒が主体となりより活発な生徒会活動が展開できるよう計画を進める。 ○SNS利用に関するトラブルは、引き続き啓発活動を継続し、事案に応じた迅速な対応を組織として行う。 ○悩みや不安を抱えている生徒へハイパーQUの結果の活用や、関係機関と連携しながら、迅速に対応していく。 ○服装等の規律違反について、継続して指導していく。 教職員からの声かけ、その場で直させる指導、担任、家庭と連携した指導など徹底する。 ○分離礼については、クラスでばらつきが起こらないように、SHRや授業等で、繰り返し指導して定着させていく。

【キャリア教育の充実】 ○適切な職業観・勤労観を持ち、意欲的に課題発見・課題解決に取り組む人物の育成 ○インターンシップの早期計画と進路LHRの活用 ○地元産業との連携を図り、専門性を深化させ、地域から信頼される人物の育成 ○資格取得の合格率向上のための指導法の工夫	○系統立てた指導により、職業観・勤労観の育成を図り、専門学科の課題研究等を充実させ、主体的・積極的な取組の推進 ○インターンシップ等、体験学習の充実 ○進路実現に向け、地元産業・大学等の理解促進を図り、進路意識の向上 ○資格取得に向けた取組を推進し、より高度な専門資格の取得	○本校が取り組んできた進路指導、キャリア教育を基礎として、キャリア・パスポートを作成した。 ○1年生は進路希望別に学校企業見学会、2年生は多くの事業所の協力を得てインターンシップを実施した。その事前・事後の指導を計画的に行い、職業観・勤労観を醸成している。 ○3年生は課題研究によりその専門性を深化させるとともに、希望する進路実現のために面接、小論文の学習に取り組んでいる。 ○各種資格試験に熱心に取り組んでいる生徒は多いが、それに見合う十分な成果は得られていない。	○キャリア・パスポートが実効性あるものとなるように修正を加え、3年間を見通したキャリア形成の道筋をつけるものにしていく。 ○インターンシップに主体的・積極的に参加し、職業観・勤労観を高め、自らの明確な進路意識につながっている。 ○就職希望者が全員内定を得ている。 ○各種資格試験の合格率が目標に達している。また、進路を意識し積極的に上位級を目指している。	○キャリア・パスポートの活用において、担当分掌を決め、年間スケジュールのもと教員間の共通認識を大切に活用推進に取り組む。 ○前年度1年時に受入先の事業所を確保し、生徒の行き先の事業所を決定するなど実施に向けて準備を進めていくことで生徒のキャリア意識を深めていく。 ○3年生の面接指導の実施時期を早め、全教職員で指導していくことにより生徒の進路意識や発信力を高めていく。 ○資格試験対策においては、知識の伝達の学習にとどまらず、学習方略を指導することで、生徒の主体的学習を促す。また、家庭で復習できる教材を用いて知識・技能の定着を目指す。	○今年度より多くの教員による生徒との関りをはか るなど、キャリアパスポートの本格運用を始めた。 ○インターンシップの受入事業所の確保は計画通りであったが、新型コロナウイルス感染拡大防止の観点から、インターンシップは7月から10月に延期したが、実施できなかった。 ○キャリア形成部に多くの生徒が出向き、担任を含めて繰り返し相談し、ほぼ進路の道筋を整えることができた。 ○教科指導や面接・小論文指導など、全教職員体制で始まり、今後本格化する予定である。 ○生徒は、それぞれの目標を決めて検定に向けて日々の学習に取り組んでいる。ICTの活用、習熟度別学習などの方法により、教職員側は生徒に対して学習支援を行っている。	C	○進路ガイダンスをおこなう際、対面が無理な場合はリモートで対応するなど、できるだけ実施するよう工夫を重ねる。 ○引き続き、進路意識の向上に努めるとともに、機会があれば可能な限り、インターンシップの代替となる学習の機会を設ける。 ○進路決定後の生徒に対して、一度学習から離れると再始動に労力が必要となることを諭し、検定学習、家庭学習を含めて継続的に学習に取り組ませる。
【地域社会への貢献】 ○地域を知り、ふるさとを愛し、広く地域社会の発展に寄与する人物の育成 ○社会貢献の推進、校外の教育力の活用	○地域活力の導入や地域活性化の推進 ○学校や地域で主体的に行動でき、地域社会の発展を進める人財の育成	○商業学科課題研究では、米子市公会堂と連携した新しいイベントを開催している。地域とのつながりを伴う活動を通じて、自らのキャリアデザインのきっかけをつかみ、進路選択の参考にできる生徒が出ている。 ○家庭学科課題研究では、いくつかの生徒企画によるものが商品化され、試食会や販売活動等ではマスコミに大きく取り上げられた。多くの方に支援していただき、地域活性化に貢献できたことは、生徒の問題解決力育成と大きな達成感につながった。 ○学校祭をはじめとして、生徒会担当の各行事や独自の取組であるあいさつ運動等の活動は生徒会長が中心となり執行部員をまとめ協力して行うことができた。まだ工夫や改善は必要であるが成果のある活動を行うことができた。	○地域と連携した取組をさらに充実させていくとともに、課題研究等を通じてそれに関わる生徒、職員を増やす。 ○2月開催予定の米南みつばち学習発表会を目標として、地域をより理解し、行動できるようコミュニケーション力・プレゼンテーション力を向上させる。 ○生徒会活動では、既存の行事を実施していくことにとどまらず、学校生活をよりよくするための新たな取組を生徒からの発案でできるような体制ができている。	○活きたビジネス教育を実現していくためにも、生徒が地域の方々に出会って地域課題に接する機会を増やし、問題解決力を養っていく。 ○商業学科新課程科目「観光ビジネス」の先行研究を行い、可能なものから現行の教育内容に取り入れていく。 ○地域貢献の高い意識を持ち、イベントには多くの生徒、教員が関われるよう校内での連携を図る工夫をする。 ○生徒会が学校生活での要望等を集約し、提案する機会を作る。	○コロナ禍によりイベントが制限され、生徒が地域に出て行く機会が減っていたが、徐々に緩和され、課題研究を中心に地域連携の取組を始めている。商業科地域振興学では、米子市公会堂でコロナ禍で市民を励ますブルーフラワーの装飾を行い、マスコミに取り上げられた。 ○商業科課題研究コンテンツ開発では、観光ビジネスに向けた取組として、皆生温泉の旅館と連携して活動している。 ○学校祭は、規模縮小、来校観覧の中止等があったが、例年のように生徒が中心となって活動し、生徒個々が自身の役割を把握し、他者とも協力しながら行動することができた。	B	○実習形態の内容の見直しも余儀なくされている面もあるが、常に緊張感をもって指導にあたっていく。 ○コロナ禍で外部との連携が難しくなっているが、安全に配慮しながら、できる活動を実施していく。 ○3年生は、2月実施予定の米南みつばち学習発表会を目標にコミュニケーション力、プレゼンテーション力の向上を目指していく。 ○学校祭など生徒会行事がコロナ禍での活動となるがリモート等の配信手法も用いながら、生徒の交流活動を継続させ交流が深まるよう努める。
【的確な情報発信】 ○学校の様子や教育内容等の伝達の工夫 ○学校に対しての正確な認識の形成	○メディアを利用した教育内容のわかりやすい伝達 ○特色ある専門高校としての人財育成に取り組む姿の発信	○ホームページを中心にイベントだけでなく授業内容についても掲載し、鮮度の高い情報を頻繁に発信した。また、商業学科の生徒が中学生にわかりやすい内容に編集した学校案内を作成した。 ○中学校への出前授業では、専門学科の出前授業メニューを送付し提案を行い、1校で実施した。	○生徒が成長していく過程がわかるような情報を発信していく。 ○米南みつばち学習発表会を多くの地域の方や中学校関係者に見ていただき、本校の特徴を理解していただく。	○各メディアでの情報発信を分掌、学科、部活動等で月ごとに点検し、積極的にやっていくとともにホームページの情報発信の推進担当を設置する。 ○米南みつばち学習発表会のパンフレットを作成し、中学生や地域の方に配布する。	○ホームページ及びfacebookの更新頻度が高く、本校の授業・行事の取組を紹介することができている。 ○体験入学の代替事業として米子南高校説明会を9月に実施し、多くの中学生に米南みつばち学習発表会の様子を紹介した。	B	○2月実施予定の米南みつばち学習発表会に向けて、実行委員会を立ち上げ、学校全体として動ける準備をしていく。 ○次年度に向けて、米南みつばち学習発表会の内容を中学校側に伝えて行くための方策を考える。
【業務改善の取組】 ○働き方改革の推進 ○時間外業務の削減	○ワークライフバランス確立の推進 ○長時間勤務者の解消	○時間外勤務時間は平成29年度に比べて25%の削減はできているが、個人よっての偏りが見られる。 ○令和2年度より学校組織を見直し、分掌数を9から5に減じて、複数で各業務に関われるようにした。	○各個人の時間外業務が月45時間以内、年360時間以内となっている。 ○「部活動に係る活動方針」に沿った部活動が行われている。	○分掌業務が効率的に遂行されているか注視していく。 ○休日の部活動においては、できるだけ顧問間で分担する。	○各分掌において、分掌業務の見直しを行い、各種業務や役割分担などを整理している。 ○部活動、行事の制限もあり、職員の時間外業務の総量は減っているが、個人差は大きい。	C	○各分掌の業務内容を整理しながら、次年度への修正に繋げていく。

評価基準（5段階） A：十分に達成 B：概ね達成 C：変化のきざし D：まだ不十分 E：目標・方策の見直し